

岡城と城下町の空間的特性に関する研究(その2)

全国の山城との比較を通して

正会員	牧田武* ¹		
同	志水昭太* ¹	同	小林祐司* ²
同	姫野由香* ³	同	佐藤誠治* ⁴

城下町 山城 クラスター分析
可視分析

1. 研究の背景と目的

本稿では、その1に引き続き、全国の山城とその城下町の関係性、特徴、傾向を把握し比較することで、岡城下町が持つ特徴、また全国の山城の中でどのような位置づけになるのかを分析する。その1で選定した、城下町が存在した14城を対象とし、城下町から城が見えるか否か、またその可視領域を調べるために、ArcGISを用いて可視分析を行う。また、その1で明らかとなった地形軸・道路軸による分類を、さらに細かく分類し直し、改めてクラスター分析との比較を行う。

2. 可視分析

表1に城下町中心からの可視分析の結果を示す。ここで、山城が城下町からの不可視領域内にあるもので、特に可視領域からの最短距離が100m以内のものは、完全に不可視だと断定しないこととする。それは、今回の元データが50mメッシュであることや、山城すべての範囲を把握していないことなどを考慮した結果である。

よって、多くの山城が可視できるが、今回不可視といえるものは、一乗谷城、岡城、七尾城の3城のみであることが読み取れる。

表1 城下町中心からの山城の可視・不可視

	可視	不可視
小谷城		
竹田城	(25)	
岩村城	(45)	
観音寺城	(50)	
一条谷城		(285)
岐阜城		
鳥取城		
高取城	(20)	
松山城		
月山富田城	(85)	
岡城		(300)
七尾城		(180)
八王子城		
岩国城		

()内は可視領域までの最短距離[m]

3. 地形・道路軸とクラスター分析との比較

その1で示した図1の地形軸・道路軸をさらに細かく分類し、改めてクラスター ~ と比較し、どのような分類になるのかを考察する。まず地形軸を、図1では「城下町が大きく開いた平野に面している」と「城下町が閉じた空間、谷に存在する」の2つのグループで分けていたが、この2つの分類では「河川によって城下町の規模・形状が制限される」といった、河川の要素が抜けていた。そこで、「城下町が大きく開いた平野に面している」グループと「地形(山・谷・河川)によって城下町の規模・形状が制限される」グループに新たに分け、城下町が2つの要素をもつ場合は枠を重ねることで表記した。次に道路軸であるが、図1では、城下町と道路の地理的關係から単純に「道路が城下町を貫通する」「道路が城下町に接する」「道路と城下町が離れている」と分類していた。そこで、道路と城下町の位置関係から、道路(街道)を中心として城下町が栄えていたのか、または城下町を避けるように道路(街道)を通したのか等を考慮し、新たに「道路を中心として城下町が発展した」、「城下町の脇に道路を通す」、「道路と城下町とが離れている」という3つに分類した。このようにして新たな視点で作成した結果を図2に示す。



図1 地形軸と道路軸による城下町の種類1

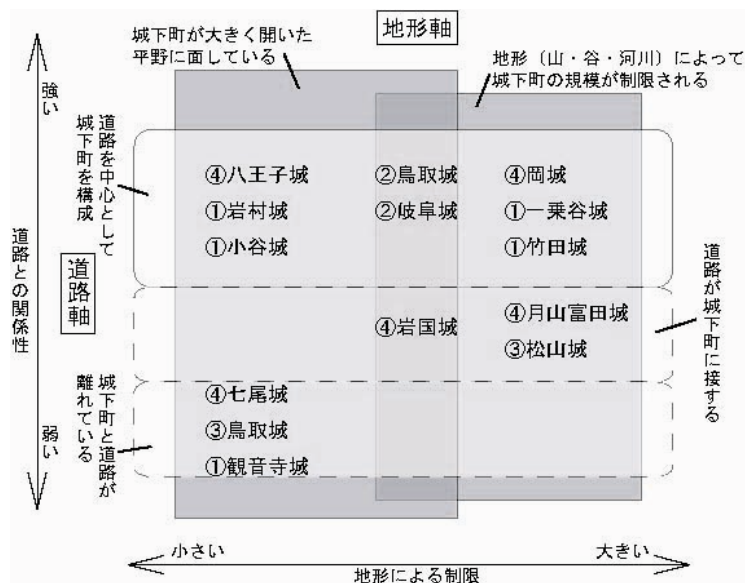


図2 地形軸と道路軸による城下町の種類2

クラスター は地形・道路軸によってそれぞれ別々のグループに位置するが、地形軸（縦軸）だけで見ると、「八王子城、七尾城」と「岩国城」と「岡城、月山富田城」の3つのグループに分けられる。これはその1で示したデンドログラムを用いた分類とも一致するため、地形軸とクラスター分析の結果は何らかの相互関係があると考えられる。またクラスターの特徴である、「高低差が小さく比較的小規模な城下町」は、どのような地形、環境でも存在していたということも、図2からいえる。

4. 総括

これまでの測定や比較、分析によって得られたデータをもとに岡城下町の特徴を見出す。また、山城の中での位置づけを行う。

岡城下町は「高低差が小さく比較的小規模な城下町」という特徴を持つクラスターに含まれる。そのクラスターの中でも岡城下町の面積は最も小さく、城下町中心から山裾までの最短距離（山城方向）は最も短く、城下町中心と山城の標高差は最も小さいという、数多くの特徴を持っている。また、図2より地形の制限を強く受け、道路との関係性も強いということが読み取れる。

可視分析の視点からは、表1より岡城下町中心からは山城が可視できないことが分かる。ほかに一乗谷城下町、七尾城下町からも山城は可視できないが、この2つの城下町は山城との標高差がそれぞれ411m、246mと大きく、可視できないのも納得できる。しかし、岡城下町の場合は標高差が63mと全体の中でも最も小さい。それなのに山城が見えないということは、岡城の特徴の1つである

といえる。これは、岡城下町と山城との間には2つの谷があり、この谷によって死角ができていないことが原因となり、城下町から山城が見えない（図3）。このような城下町と山城の間に谷があるケースは他にはない。また、岡城下町周辺ほど大きな河川が複雑に入り組み、天然の堀となっているケースも存在しない。

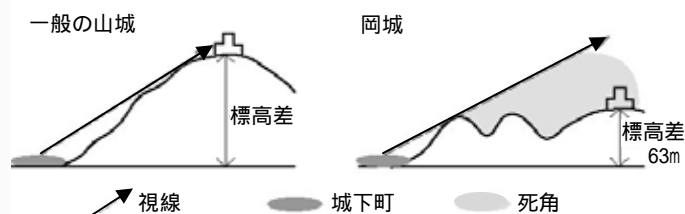


図3 イメージ断面図

さらに、岡城は築城されてから明治期の廃城令が出されるまで、城が存在した城の1つである。対象とした城の中では岡城、鳥取城、高取城、松山城の4城しか存在しない。クラスターの中では唯一岡城のみである。他の3城は鳥取城（クラスター）、高取城、松山城（クラスター）である。

鳥取城は城下町から可視でき、山当てが存在し、広大な城下町が放射線状に広がっている。複数の路地から山城を望むことができる。高取城は山城と城下町が最も離れた位置（約3km）にあるにもかかわらず、城下町から可視できる。松山城も城下町から可視できる位置にあり、山当てが存在する。ゆえに、鳥取城、高取城、松山城において、山城は城下町から可視することができ、城下町の象徴的存在であることが分かる。しかし、岡城だけは他の3城と異なり、城下町から可視することもできなければ、城下町の象徴的存在でもない。このような山城と城下町の位置関係でありながら、明治までの長い間城下町として発展した岡城下町は、非常に珍しいケースであるといえる。

以上のことから岡城とその城下町は、全国の山城の中でも特異な性質をもっているといえる。

【参考文献】

- 1) 図説 城下町都市, 佐藤磁著, 鹿島出版会
- 2) 岡城跡と城下町竹田 歴史の道, 竹田市
- 3) 竹田区域街なみ環境整備方針政策報告書(資料編), 竹田市
- 4) 復元大系 日本の城, 坪井清足, 吉田靖, 平井聖, ぎょうせい

*1 大分大学大学院工学研究科博士前期課程

*2 大分大学工学部福祉環境工学科建築コース 准教授・工博

*3 大分大学工学部福祉環境工学科建築コース 助教・工博

*4 大分大学理事・副学長 工博

*1 Graduate Student, Master's Course, Graduate School of Eng., Oita Univ.

*2 Associate Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Oita Univ., Dr.Eng.

*3 Research Associate, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Oita Univ., Dr.Eng.

*4 Trustee and Vice President, Oita Univ., Dr.Eng.